

土のコロイド現象—土・水環境の物理化学と工学的基礎

足立泰久・岩田進午 編著

学会出版センター 2003年2月刊

451頁 定価 5,333円

大冊である。手首にずしりと来る。各方面を代表する大勢の著者の手になるものである以上、これくらいの大部になるのはやむを得まい。だが、決して辞書的ではない。序章から終章まで読み通して土を知ってほしい。土がかかわっている社会的に解決すべき課題に向かい合っている技術者や科学者は土についてこのくらいのことは承知した上で事にあたって欲しいという編者の意図がひしひしと感じられる本である。ここに集積された科学は、これまでコロイドが懸案となる様々な専門分野でそれぞれ個性的に研究され、多様な文献や書籍に個別的に分散して掲載されてきたものである。それを網羅して、土のコロイドというフォーカスをもって相互の脈絡をつけたいという意図も感じられる。編者に敬意を覚える。

淡々として本質を突いた序章を楽しみ、明快な粘土コロイド描像に共鳴しながら、クラシックな知識が並んでいるなあと思いつつも我慢して目を通していくと、何がそうかは読者の手に残すが突然先端的な科学が紹介される。さらに、現場で通用する、ないしは現場で取られたマクロなデータの紹介があり、その貴重な解釈が古典と先端との関係で納得できるようにつづられている。大部とはいえ最後まで一息に読みたい本である。

これから土を学び、土の技術を磨こうとするものは、

基礎の部分を丁寧に読むと良い。これから土を工学しようとするものは、現場のデータ解釈の部分をじっくり咀嚼すると良い。これから土を科学しようとするものは、第8章環境工学的課題における土のコロイド、第10章土壌の収着現象と化学物質の挙動、あたりから研究テーマを拾うと良い。いずれのところも、難解な記述はなく読んで理解できる本である。オリジナルで読むと難解な基礎的事項の部分でも見事にわかりやすく記述されている。編者と分担執筆者双方の努力を買いたい。

引用文献が612編挙げている。土とコロイド科学に関する情報の宝庫になっている。枚挙に暇ないほどの名著、必読文献が含まれている。出来るものなら、この中で主要なものはいくつか読むべきである。また座右に置いておきたいものである。その峻別は本文をよく読み込み、取捨選択することになる。執拗に文献検索を試みたい。

この書が契機になって土壤科学と環境科学のコペルニクスの転換がもたらされるかなあと思いつきながら読み通した次第である。

中野政詩（ソイルサイエンス総合研究所）

受稿年月日：2003年8月31日

受理年月日：2003年8月31日